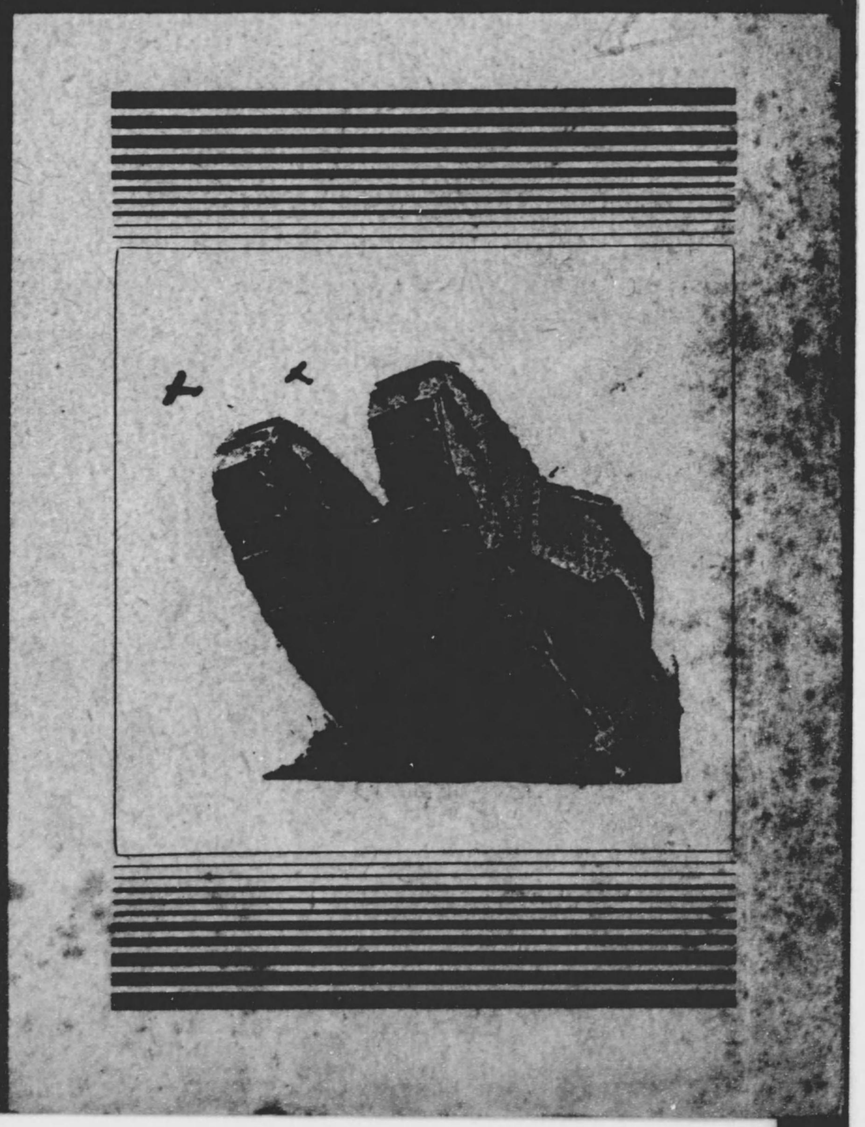
特240
827



2

0036335000

0036335-000

特２４０－８２７

国望国家の建設と労士の錬成

飛田勝造・述

飛田勝造

昭和１６

AGF

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

成錬の士勞と設建の家國

特240
827

飛田勝造述

特240
827

目次

一、緒言……一
二、戰時の産業と自由勞働者の指導……二
三、銃後國防と自由勞働者の訓練……四
四、自由勞働者の精神的覺醒と勞士の錬成……三
イ、自由勞働者……三
ロ、自由勞働者に勞士魂の喚起……三
ハ、勞士錬成の余の體驗……四六
五、結論……六三
附錄……六九
寫眞版

昭和十二年
帝國圖書館藏

國防國家の建設と勞士の錬成

一、緒言

高度國防國家の建設は人と物との二方面からこれを討究せねばならぬ。然し百年戰爭の遂行を豫期せねばならぬ現在の國情から見て、一番こゝに必要なものは、何よりも、先づ全國民の奮起が第一だと思ふ。肇國の精神に生き皇國の理想達成のため、全國民は如何に處すべきかとの自覺と奮起だに有れば、新鋭なる科學兵器でも、精鋭なる軍人でも、必ず夫れは整備されずは置かれない。舉國一致眞に國民が火の玉のやうになつて結束したとなれば、如何なる敵國と雖

も、恐らく皇國に向つては來られまい。又た來たからとて決して夫れが怖いものでもない。

然しこの全國民の自覺と奮起も、たゞ精神的に自覺したり奮起したりしたゞけでは駄目だ。この自覺と奮起とに因る身心の訓練がなければ現實の戰爭には役に立たない。即ち忠烈の精神を持ち、この身體を持つて始めて萬全が期し得られるのだ。所が精神的方面の自覺と奮起は動機如何に依つては一と晩の中にも之を堅持する事が出來るのであるが、身體的方面の訓練は中々そう簡單には成らない。從つて眼前の戰爭に直ぐ役に立てる爲には、どうしても身體的に訓練ある者に、精神的自覺をして貰う方が早や手廻しだと思ふ。例へば今此處に爆彈が落ちて來た場合に、火を消したり、避難者を救助したり、立ち所に機敏な動作に堪え得る身體の持主が直ぐ役に立つ譯で、この意味に於て筋肉勞働者の自覺と奮起を圖る事が刻下の最大急務だと信ずるのである。

筋肉勞働者は其の數に於ても、全國民の殆ど八割を占めて居るし、又國家産業の極めて重要なる部門を擔任して居る。謂はば如何なる時代に於ても人的國防の根幹を爲して居る者は彼等であらねばならぬのだ。所が此の筋肉勞働者の中に自由勞働者と謂ふものがある。關西ではこれを仲仕と謂ひ、關東ではこれを人足と謂ふ。俗に鮟鱇とも謂はれ、立ん坊とも謂はれてゐる。全國を通じて少くも二百萬人を下らない員數が有るのであるが、國民の中でこれ程どん底生活をしてゐる者はない。そうして雪が降れば雪掻きに傭はれ

火事が有れば跡片付けに傭はれると謂つた具合に、天災地變の有つた場合等は寧ろ彼等は却つて其の爲に惠まれてゐる。從つて若し大都會に爆彈が投下された場合に、案外平氣に濟まして居られる者は彼等だと思ふ。若しそうした場合に身命を惜まず勇敢に働かす事の出來るのも彼等で有り、一度これを誤れば忽ち暴民と化して、支那の匪賊の如くなるのも又彼等であると謂ふ事を見遁してはならない。

しかも彼等には國家産業上重大なる責務が課せられてゐる。即ち軍需勞力とか、炭鑛勞務とか謂ふものに、彼等は直ちに之に呼應してそれに蝟集して行く。

そうしてこの勞働者は一樣にその生活は低級ではあるが、其の一人々々の人間そのものは決して一樣ではない。これ位種々雜多な人間を包容して居るものは無いのである。專門學校の卒業生も居れば小學校へも行かない者も有る。非常な秀才型も居れば、からきしの低腦も居る。同じ落ちぶれ者と謂ふ衣は着けてゐても、中味は決して一樣ではない。其處に中々統御し憎いものが有ると同時に、又た統御して行く興味もあるのである。

然し如何に夫れがどん底生活をしてゐやうが、又統御し難い存在であつたとしやうが、苟も其の勞力は國家産業に缺くべからざるものでありとするならば、これはどうしても彼等に對して、社會的の存在價値を與へてやらぬ事は間違ひだ。即ち之れに對して社會的地位を認めてやる事が肝要だ。そうして共に手に手を携へて高度國

防國家の建設に邁進して行かねばならぬ。殊に彼等をして永く頽廢的氣分に沁らせた所以のものは、勞力請負業者の無慈悲な仕打に基因する處尠くないのである。苟も日本人で有るならば、落ぶれて袖に涙のかかる時これを慰めたり、いたはつたりしないでは居られぬ筈を、丸で首吊りの足を引張るやうな業者が相當多かつたのである。勿論斯樣な境遇に在るからと謂つて、無暗に之に恩惠を與へたり、救助したりするのは徒らに乞喰根性を誘發するのであるが、獨り立ちの出來るやうに仕向けて行く位の世話だけはしてやる必要がある。また斯くしてこそ、彼等の責任生活が生れて來るし、國民としての自覺も出で來るのであつて、そうして始めて天災地變と謂ふやうな場面に遭遇しても暴民化するやうな危險が無くなる。又た彼

等と雖立派な日本人である。彼等の體には大和民族としての血液が流れてゐる。彼等の本性は竊かに又たそうなる事を望んでゐるに相違ないのだ。

如上のやうな事柄を私は早くから考へて來た。そうして自由勞働者の自墮落が果して匡正し得るかどうかを身を以て經驗した事がある。即ち奥多摩の僻村に精神修養道場を設けて、一千人からの自由勞働者を收容して、之等と起居を共にしながら世界第二位の大堰堤工事に從事した事がある。手に負へない樣な人間でも、少しの誘導さへ與へて行けば立派な良民になれるものだと謂ふ事が、其の時つくづく體驗し得たのである。即ち吾々業者が同じ大和民族としての誠意を以て導けば、彼等は必ず救はれるものであり、國家も亦

た之に因つて非常に稗益せられるものだと云ふ確信を得たのである。

約二ヶ年の奥山住ひの結果私はこの貴重な體驗を得、以上の確信が出來たので、私は奥多摩から歸ると同時に、直ちに同志と共に、東京倉庫運送仲仕業共濟組合を結成して、其の理想の實現に努めたのであるが、何を謂ふにも自分といふものが微力な上に、創業の日が未だ淺い爲に、仲々所期の目的が達成せられない。未だその萬分の一も果し得ないで居るやうな狀態であつた。所が幸にも大阪神戸等の同志が我れ等に相提携してくれる事になつて、今般全日本勞務供給業組合聯合會が設けられることになつたことは、私としては洵に心強い限りで、實に欣快に堪えない、ものがあるのである。然し乍ら其

の對手は少くとも二百萬を降らない自由勞働者だ。之を現狀から覺醒せしめると謂ふ事は實に容易ならぬものが有るのだ。しかもこの大使命の遂行に當るべき業者即ち組合員にも、未だ相當舊體制を堅持して、依然として首吊の足を引張らんとして居る向もある。此の業者の反省を求め更に其の勞働者を覺醒せしむるのは可成に困難な仕事と謂はねばならぬ。しかもこの事業は現下の時局產業を見て急速に其の實現を圖るべき必要に迫られてゐる。

以上は自由勞働者竝にこれを取扱ふ勞力供給業者の素質改善の問題であるが、今度吾々同志に依つて創設せられた、全日本勞務供給業組合聯合會の使命は、如上の事業を遂行する以外に、更に現下の國家產業に呼應して、勞力の統制配給の下部組織たる役目を果さねば

ならない。即ち吾が全聯は各地の聯合組合に連絡し、各聯合組合は其の地の各組合に連絡して、國内の全職場に對して勞力の按配に任じ、政府の職業指導機關の下部組織となつて、之に協力すると同時に、一面に於ては自由勞働者を其の日其の日にアブれさせないやうにする。斯くして時局産業の能率向上に寄與しなければならないのである。

勞力の統制配給は固より政府の仕事であるが、澎湃として押し寄せて來た時局産業の波には、斯うした下部組織によつて政府の仕事の仕良いやうに仕向けて行かねば、決して其の事業の圓滑なる遂行は望めないのであつて、一つは吾々業者の職域奉公の一端として、一つは自由勞働者の福祉を增進する爲め、敢て自ら進んで、國策遂行の一翼を擔はんとしたのである。

之を要するに、吾々は茲に全日本勞務供給業組合聯合會を創り、之に依つて陸仲仕全體の自墮落を匡正し、更に此の陸仲仕を取扱ひつつあるお互業者自身の弊風を除去し、そうして政府の職業指導機關の下部組織となつて、時局産業の完全なる達成に寄與し、以て高度國防國家の建設に邁進せんとするのである。

二、戰時の産業と自由勞働者の指導

聖戰五年を經過したる今日、世界の國際關係は益々吾が國に不利なるものがあつて、實に皇國の安危に關する樣相を呈してゐる。開闢以來金甌無缺の皇國日本を護るために、我が國の産業機構は空前

の大旋廻を斷行せねばならなくなつたのである。それ飛行機だ、それ戰車だ、それ大砲だ、それ軍艦だ。石炭は增產せねばならぬ、鋼鐵は作らねばならぬ。今迄の平時產業には思ひも寄らなかつた事業が無數に殖えて來た。從つて平時產業の方面に當てられて來た勞力を、其の方面に振り向けて行かねばならぬ。卽ち時局產業に對して優先充足をして行かねばならぬことになつた。實際に於ても又た斯うした時局下の緊要產業に對して勞力充足の優先權を認めよと謂ふやうな要請も各方面から起つて來てはゐるのである。又之に對して國家の職業指導機關が銳意その需要を充たす爲めに、殆ど其の全力を擧げてゐる。

然し多年の取引關係は簡單に現場關係の變更を許し難い實狀があるのであつて、優先充足と謂ふ事も其の實績を具現すると謂ふことは仲々困難な狀態に置かれてゐるのである。

卽ち國家の職業指導機關は、是等の事象に對して、或は時局產業の重要性を說き、或は勞働者の愛國心に訴へ、血みどろの努力を續けては居るのではあるが、如何せん澎湃として流れ出して來た處の夥ただしい需要に對しては、其の紹介所の規模なり、事業なりは餘りにも夫れは眇たるものであつた。從つて此の血と汗とを惜しまないで働いて下さる指導所職員の努力に對して、この要員充足の實績は餘りにも駈け離れて居たのではなからうか。

成る程、凡百の事業悉くを戰爭目的に集中すると謂ふ今日、若し非常時局に對處する產業の要員充足には、如何なる國家權力の發動も

期待し得るのではあるが、然し國民の大部分は各々其の職域に就て御奉公をして居るのである。即ち農は食糧の增産に就て努めて居るし、商は日常必需品の配給に就て努めてゐると謂つた具合で、夫々高度國防國家建設の一翼を現に擔任してゐるのである。そうした關係に在る全勞働者を統制することは如何に國家權力を以てしても容易に行はれるものでは無い。況んやそれを別箇の職業に轉向せしむることは難事中の難、只僅かな事である。歸還軍人とか、失業者とか、若しくは各種學校の新卒業生と謂ふやうな、現實の職業を持たぬ者に適用せられるに過ぎない。斯くの如き程度のものでは漸く其の需要の何割かを滿すに過ぎないのである。しかも斯れとて或は家族との關係に於て、又た或は前職との關係に於て、其の悉くを

當局の目的の產業にのみ振り向けると謂ふことは相當に困難な事だと思ふ。

其處で近來では、自由勞働者と謂ふものに目を付けて、全國二百萬の此の自由勞働者を、時局產業の夫れぞれの職場に常備的に配屬せしめては如何と謂ふやうな議論も出て來た。即ち仲仕人足と謂ふやうな其の日傭ひの人間を常傭にしてこれで其の需要員數を充足しやうと謂ふのである。成る程、一應御尤もな話ではあるが、然しよく考へて見ると、是れは頗る無理な話で、然らばその自由勞働者は遊んで居たかと謂ふに決してそうではない、毎日それぞれの時局產業なり、其の他の產業なりの職場に使役されて來てゐるのであつて、それを一局部にのみ常傭として偏在せしむるならば、他の方面にはこ

れを繰り廻す事が出來ないと謂ふことに相成る。これでは困るのである、謂ふ迄もない事だが、其の國の産業組織と謂ふものは、各組織共常に一定して動かない勞力を必要として居るものではない。どんな現場でも、またどんな事業でも、澤山な人手を使はなければならぬ時もあれば、そう澤山な人手を要らない場合もある。斯樣な場合に澤山な人手を要する場合の員數を常備すると謂ふことは甚だ不經濟な話で、現下の如き非常時局に於ては殊に人的資源の關係上、これは差控へねばならぬことだと思ふ。即ち斯樣な場合に國内に或る程度の浮動勞力とも謂ふべき自由勞働者と謂ふやうな者を置いて、各産業組織は國の必要に應じて、最も人手を必要とする場合には臨時に之を備ひ、平時は各々最小の所要員數を常備して行くと謂ふ

ことが必要なことだと思ふ。又そうする事に依つて始めて産業經濟と謂ふものが成り立つて行くのである。然るに自由勞働者を悉く常傭者に配屬せしめた場合に、果してこの浮動勞力は何人がこれを勤めるかと謂ふことにあるのである。

茲に於て痛感した事は、吾々勞務業者竝に組合員各自の職域奉公を以てこの對策を樹てなければならぬと謂ふことである。即ちこの勞務業界同人の縱横の連絡に依つて、自由勞働者の統制竝に配給に就て、當局の下部組織となつて御奉公申上るといふことである。然し乍ら之れが又た極めて困難な事業であるのである。この事業は果して可能であらうかどうか、私は率直に答へ度い。指導宜しきを得れば必ず可能だと、成る程、全國民の中で恐らくこの自由勞働

者程どん底の生活をし、又た頽廢的な氣分に、沁つてゐるものはあるまい。即ち立ん坊だとか、鮟鱇だとか、甚だ不名譽の名稱を頂戴して、しかも恬として恥る所なく、人からも退け者にされ、また自分でも敢てそれを氣に留めてゐない。謂はば天下放し飼とでも謂つたやうな生活を平氣で續けてゐる。從つてこれを一つの規律に入れて人並の考へを持たせ、さうしてこれを國家のために貢獻させると云ふには極めて難物ではある

然しまた一面から見ると、斯うして生活をさして置くから自然と捨て鉢的な、自墮落な人間になつて行くのであつて、もう少し世間が彼等の國民的な地位を認めて行くやうにしたならば、恐らく彼等と雖もあのやうな頽廢的な氣持にはなるまいと思ふ。即ち彼等と雖

も同じ人間の温い血液が通つてゐるのだ。しかも其の個性は極めて素朴な單純な者が多いのであつて、若し世間が彼等に對して人間扱ひをするやうになつたとしたら、必ずや人一倍の感激性を持つやうになるのではあるまいか、若し國民が彼等の國家產業に寄與しつつある功績を認め、さうして彼等を指導すべき者が、其の心血を注いで其の敎化誘導に努めることが出來れば、如何に彼等の良心が現在眠つて居たとしても、必ずや是れに感化遷善されて行くに違ひないのである。

而して、この自由勞働者の眠れる本性を喚び醒す爲には、先づ第一に日常彼等の世話をして居る勞務業界の同人に御願ひしたいものがある。即ち如何に立ん坊でも鮟鱇でも、彼等も同じ大和民族であ

り、しかもお互は彼等の勞力を供給して行く事が職業である以上、謂はば彼等はお互のお客樣であらねばならぬ。然るに如何に其の對手が無氣力であつたとしても、また如何にそれが低級であつたとしても、頭からこれを奴隷視して行くやうな事は間違つてゐると思ふ。殊に彼等の賃銀の中から各種の手數料を自分の氣持次第に搾取してゐるやうな舊來の因習は甚だ良くないと思ふ。勿論相當の手數料は止むを得ないのであるが、故意に彼等の勞力を値切り倒すやうな事は宜しくない。若しかうした弊習の爲めに、國家の産業組織の上に無くてならない所の、浮動勞力を低下して、其の能率を下げるやうな結果を招來したならば、さうしたお互の行爲は國家の産業を蠹毒しつつあるものだと謂はれても、これに對して反駁する事は出來ないことになるのである。

從つて吾々同業者はお互の間にこれは自肅して行かねばならぬ。殊に刻下の如く時局産業の緊迫下に在つて、少しでも時局産業を助長し、その能率を向上せしむる爲めには、その産業組織の原動力である、自由勞働者を改良して行かねばならぬ處の責任があるのである。これは確に現代の時下に於て吾々に課せられた處の一つの使命だと思ふ。この使命の自覺と遂行とが、所謂吾が勞務業界の最も尊き職域奉公だと思ふのである。

三、銃後國防と自由勞働者の訓練

今や吾が國の銃後國民は防空の研究に餘念もない狀態に在る。

やれ避難者調査だとか、やれ防空壕の建設だとか、一生懸命になつて適當の方法を考究して、日も猶足らない感が有るのである。然し自分をして率直に謂はしむるならば、現時の戰爭は未だ開戰とも氣のつかない劈頭に於て、敵國の心臟部を空襲して、さうしてこれを木葉微塵に粉碎すると謂ふことを戰略の上乘とされて居る。即ち豫期してない時期に突然空爆の洗禮を受ける事を豫期しなければならない。若しさうした場合、今此處でどれ程避難者調査をして居たからが、果して交通機關其の他が一絲亂れずに其等を避難せしめることが出來るかどうか、又た今俄かに防空壕を作つたとしてからが、東京市の如き大都市が燒夷彈のために火の海と化した際に、果して其の防空壕が住民の生命を保護し得るかどうか、勿論之等は惡い事ではないが、國民をして單に斯樣な施設にのみ依存せしめたならば、其の場合に臨んで意外な混亂を惹起しはしないかと謂ふことを一應考へて見る必要があると思ふ。

自分は空爆を連想する時、必ずあの帝都の大震災を追憶するのであるが、彼の大震災は忘れもしない午前十一時五十九分の大地震が原因で大火災になつたのであるが其の大火災は大地震と共に直ちに紅蓮の猛威を逞ましうしたのではない、未だ午後の二時三時頃は火元は其方此方に點在して居つて決して猛火と謂ふたやうなものではなかつた。從つて市民の多くは火災と謂つたやうな事は寧ろ氣にしないで、次ぎに來るべき大地震に先づ自分が震へ戰いて居た。さうした油斷に乘じて火はどんどん燃へ盛つて遂に帝都を悉く紅

運の炎と化したのであるが、若し彼の時に於て市民が一絲亂れない處の精神訓練が出來て居れば、あれ迄燒けないで濟んだのではないかと思ふ。

彼の日の午後一時頃自分は日比谷公園の前を歩いて居たが、其の時公園内では松本樓が燒け落ちて、公園前の電車の交叉點の、今の日本生命の隣りの十文字の角が盛んに燃えてゐる處であつた。さうしてお壕からポンプで水を揚げ、ドンドン消してゐる最中であつたが、どう謂ふものかポンプの係員が二三名位しか見えなかつたやうに記憶してゐる。さうして其の近所には大した火災もなかつたやうであつたが、其の翌日になつて見たら全市は殆ど灰燼に歸して、自分が前日見て通つたポンプはお壕に据え付けた儘で、其のポンプのお隣りの警視廳が丸燒けになつてゐた。あのお壕の水があり、さうしてポンプは据え付けてある。さうした儘で帝都消防の本家本元の警視廳が丸燒けになる。こんな馬鹿氣た話は無い筈であるが、事實は如何とも致し方がなかつた。これは何が原因かと謂へば人心の動搖、若しくは混亂の爲であつたのだと思ふ。即ち空前の大地震に周章狼狽してしまつた人等は、もう其の頭の中には思慮分別と謂ふやうなものを保持して居る餘裕がなかつた。會社員であらうが、官吏であらうが自分の職責を護る所の騷ぎではない。どうして安全な所を見付けやうとか、自分の妻子はどうしただらうかとか、と謂ふやうな殆ど本能的な氣分にのみ駈られて、遂に其の職場を護らなかつたからあんなになつたんだと思ふ。若し彼の場合誰かが大聲

叱呼して逃げ出さんとする消防職員に對して、其の職責を喚起したならば、恐らく警視廳迄燒かなくて濟んだのではなからうか。現に彼の神田佐久間町河岸の一部は、あの猛火の中に在つて其の一角を救う爲めに身を挺して、防火の指揮に努めた勇者のあつたお蔭で、周圍全部燒け落ちて居るのに、唯一つ、彼の所だけが助かつてゐる實例があるのである。斯樣な實例を追想して來ると、變災に直面して決して市民をして混亂せしめないと云ふ工夫が、防空の根本的條件を爲すものだと確信するのであるが、斯の場合更に一歩深く立入つて見ると、今一つ眼に見えない恐しい者が考へられるのである。即ちそれは市井無賴の徒の存在である。浮浪人だとか、ルンペンだとか住むに家なく、着るに衣類もないと謂ふやうな者が、混亂に陷ちた良

民に對してどんな擧動に出づるかと謂ふことを考へなければならない。古來日本には『火事どろ』と謂ふ言葉がある。普通の良民でも他人のどさくさ紛れに、一寸失敬して見たいやうな氣分が出てくるものだとすれば、平常それが習癖になつてゐる無賴漢が何を仕出かすか判つたものでない。財物の竊取若くは强奪、婦女子の誘拐暴行、我時玆に來れりと許りに跳梁して、恰も支那の匪賊のやうな行動に出でないとは誰がこれを保證し得るか、現に彼の大震災直後に於て、所謂左翼と見做されて居た連中が、或は罹災者收容バラックを占領したり、或は市當局に對して配給品の强要をしたり、相當眼に餘るやうな事をして來てゐるのではないか。さなきだに思慮分別を失つてゐる良民は、どんな場合に彼等の毒牙に嚙みつかれるか圖り知

れないものがあるのである。

以上幾多の場合を考慮して來ると、現在どん底生活を續けて居る自由勞働者を、其の境遇的にも亦思想的にも現狀の儘で爆彈下に曝らして置く事は實に危險千萬なものがあると思ふ。即ち彼等は臂力に於て通常人に優つてゐる。さうして家も無ければ家族もない點に於て、爆彈に對しても極めて平氣な氣持でゐることが出來る。從つて混亂時に際しては思慮も良民には優つてゐる。而して斯樣な連中が其の健脚を利用して市内を縱横に馳驅したならば、丸で東京市民は懷に彈丸を抱いてゐるやうな危險感があるのである。

飜つて又た斯樣な特長のある自由勞働者が全部夫れが良民であつた場合にはどうなるかと謂へば、臂力、脚力、體力の何れも優れてゐ

る上に、後ろ髮を引かれる家族もなければ、又た家も家財もない彼等が、或は避難者を援け、或は防火に努めてくれたとしたら、それこそ市民は百萬の味方を得たよりも心强いであらう。即ちこれを善用する場合と惡用する場合とでは全く雪と炭程違つて來るのである。

目下東京市内には二萬人以上の自由勞働者がゐる。尙この外に運輸交通とか、土木建築とか、各種工場とか謂ふやうな方面に從事してゐる下層常傭人夫を加へたならば相當の數に上ると思ふのであるが、斯の總ての人等の向背は、實に有時に於ける帝都治安の死活問題だと思ふのである。今にして之れが對策を考究するに非れば、恐らく幾百の防空施設も殆ど其の意義を沒却する結果となるのではなからうか、吾々は衷心からそれを怖れるのである。即ち吾が全日

本勞働供給業組合聯合會は、斯の如き場合にも備へて、日本全自由勞働者の國民的自覺を喚起せんとするのである。而して彼等自由勞働者は果して現狀より覺醒するであらうか、自分は斷じて覺醒する事を確信してゐるのである。以下項を改めて之を說かんとするのである。

四、自由勞働者の精神的覺醒と勞士の練成

勞働者に日本精神を堅持させると謂ふことは、自分としては多年の宿望でもあり、又其の具現と云ふ事に就ても必ず出來ると云ふ確信を持つて居る。勿論何百萬といふ自由勞働者に對して之を今直ぐでも掌を返すやうに卽時覺醒せしむると謂ふことはそれは固より困難な問題ではある。假令對手がどんなどん底生活をして居るはしたない連中であつても、匹夫も志を奪ふべからずと云ふではないか。殊に頑くなにゆがめ込まれて居る彼等の氣持を、何とかして此處で考へ直させると謂ふことは、仲々容易なものではない。然し犬でも、馬でも之を導くに道を以てすれば慣れて來る。況んや彼等と雖も人間だ、而も立派な日本人だ。必ず覺醒せしむることは出來るに相違ない。以下この問題に就て自分は少しく詳說して見たいと思ふ。

イ　自由勞働者の現狀

自由勞働者の品位如何と謂ふ問題を、常にその自由勞働者と生活を共にして居る自分の口から曝くと謂ふ事は、どう考へて見てもこ

れは實に情けないことではあるが、現下の國情は、そんな區々たる感情にこだはつて居る時ではない。つまらぬ遠慮に國家の大局を誤るが如きことは絶對に許されない。

即ち假令國民の一人でも、苟も國家の現狀を理解しない者があれば、それは直に叩き直して其の者をして國策の遂行に協力させる必要がある。斯樣に考へたので、玆に率直にその積弊を述べて見たいと思ふ。

一口に自由勞働者と謂つても、全國を通じて數百萬人を數へられるのであつて、中には立派な人等も固より尠くなくは無いのであるが、然し概してこれを見ると實に情けない連中が多い。即ち自分で自分の魂が何處にどうして居るのか判らずに暮してゐるやうな者

が、極めて多い。實に謂ふに忍びない腑ぬけ野郎ばかりが揃つて居ると思ふ。即ち彼等の頭の中は、今現在直面してゐる處の目先きの事ばかり考へて居つて、どうして喰はうか、どうして飲まうか、どうして博打を仕ようか、どうして怠けようかと謂ふやうな、そんな下卑た事ばかりを考へて居るのであつて、決して夫以上の事を考へて見ようともしない。まあ大體に於て牛だの、馬だのの生活とそう變りのない生活に於て彼等は自ら安じて居るのだ。然しその生活が如何に下卑て居ても、彼れ等も人間である、或は博打を始めて見たり、或は金に窮して窃盗を仕たり、搔拂ひを仕たりすると言つたやうに、其の方は人並な惡智慧を持つてゐる。寧ろ牛だの馬だのより、仕末が惡い點があるのである。

そんな譯であるから、固より將來に備へるとか、自己の向上を圖るとか謂ふやうな事は、彼等にとつては、何の價値もなければ、又何の興味もない問題で、そんな事はてんで考へて見ようともしない。たゞもう少しでもお金が手に這入れば、直ぐ最寄の屋臺店か、飯場に飛込んで、安泡盛か電氣ブランと謂つたやうなものを煽つて、やくたいもなく醉ひつぶれて半死半生のやうな姿で路傍にぶつ倒れて居たり、若しくは木賃宿に這ひ戻つて愚にも付かないクダを巻いて、さうして合宿の人等に迷惑を掛けたりして居る。

それでも斯うしたのは未だ良い方で、ホンのつまらぬ事に因緣をつけては、大立廻りの喧嘩を始めて見たり、鑑錢博打に夢中になつて今迄の親友と毆り合ひを始めたりして、とどのくゝりは何時でもその筋の御厄介に相成る樣なことばかり仕出かし、又そうしたことで無一文になつて仕舞うと、前科者とか云つた樣な惡友に唆のかされて、盜みをしたり、喰ひ逃げをしたりする樣になる。實にそれは手に負へない自墮落な生活を續けて居るのである。

そうかと思うと、中には、なか〳〵屁理屈をコネ廻す連中もあつて、何處で聞いて來たのか、自由がどうだの、權利がどうだの、まるで木に竹を接いだ樣な理屈を放送して、一かどの思想家を以て任じてゐる向もある。然しその自由たるや放縱、放慢を自由と履き違へて見たり、その權利たるや自分勝手の庇理屈を權利と早合點して見たり、實に愚にもつかない世迷言を並べて居るに過ぎないのであるが、それでも自己陶醉に陷つて居る御當人は、それを天晴れ新發見の社會理

念でもあるかの様に考へ込むで居るのであるから洵に始末が惡い。何れにしても實に御し難い代物許り揃つて居るのである。

關西では之の自由勞働者のことを鮟鱇と謂つて居るのであるが、何故そんな名前をつけたのかと謂ふと、その說明が中々振つてゐる。即ち鮟鱇と云ふ魚は決して自分から進むで餌を探し求めるやうなことは仕ない。さうして大概一つ所にじつとしてゐて、餌の方から近寄つて來るのを待つてゐるんだそうである。その不精さ加減、物臭さ加減が如何にもこの自由勞働者の怠惰性に似たものがあるので、何時とはなしに斯樣な有難い名前が出來たんだと謂ふ。成程そう謂はれゝば、味い名前を見付けたものだと思ふ。

以上が吾が親愛なる自由勞働者の多くの現狀で、斯うした人等が

東京だけでも少くとも二萬人は降らないのである。

□ 自由勞働者に勞士魂の喚起

近來日本精神の再認識と謂ふことが喧傳されてゐる。日本人であり乍ら日本精神を再認識せねばならぬ程、日本精神を忘れてゐたり、認識して居なかつたりして居る者が有るとすれば、これは日本の國家に取つて實に由々敷しき問題だと思ふ。

しかも斯の日本精神再認識の叫びも、大體に於て金持だとか、知識階級だとか、さう謂ふ特殊な人等に依つて叫ばれてゐるやうな傾きがある。折角の叫びもこれでは甚だ不徹底なものだと思ふ。何故なれば一億國民の殆ど大部分は、斯うした特殊の人等では無いからだ。即ち有識・有產の人等は全國民の僅か二割か三割位の數しか無

いのであつて、一億一心を立て前として居る現下の國家體制に於て、これでは餘りにも心細いのである。

少くとも現在の時艱を克服する爲には、全國民に日本精神を強く認識させて行くと謂ふことは、どうしても之を國民の全部に徹底させて行く必要が有るのである。さうして同じこれを徹底させるにしても、今迄これを認識しなければならぬのに認識しなかつた者や、認識して居りながら徹底し得なかつた者、即ち有識有產の人等よりも、寧ろ今迄さうした事には餘り頭を突き込むでゐなかつた勞働者と謂つた樣な大衆方面に働き掛けることが一層必要なものが有ると思ふ。

自由勞働者と謂ふやうな低級な生活をして居る者は、日常卑近な

殆ど本能的な欲望より持つて居らない。さうして極めて原始的な生活を繰り返して居るので、中々國民精神とか、日本魂とか云ふやうな、高尙な自覺に迄は中々達し得ない。即ち社會を認識し、國家を認識し、大和民族を自覺すると云ふ樣なことは、單に飮むで喰ふて、活きて行くだけの彼等には、少し緣遠いことではある。然し苟しくも日本人である以上、この日本精神を忘れて居て良い筈はない。ただこれに對して世間がやれ立ん坊だの、やれ鮟鱇だのと殆ど仲間外れにして居るから、彼等も遂に自尊心を失つてしまつて、寧ろ捨鉢的に自墮落をして居るので、決して今の樣な境遇を自ら樂しく思つてゐるのではないのだ。即ち彼等の精神的頽廢を攻める前に、先づ彼等をして如斯く頽廢せしめるに至らしめた社會の罪も亦問ふ必要が

あると思ふのである。

若し彼等をして、上御一人以外は悉く平等な人格を具備してゐるのであつて、國民としては、一視同仁の待遇を國家が與へて居るのだと謂ふことをはつきり自覺せしめることが出來れば、必ず其の品性も向上して來るのであらうし、又思想も立派に完成されるであらうし、自然とその自墮落も匡正されて來ると思ふ。何故なれば、彼等と雖も決して自己の墮落を自ら樂しむで居るものではないからである。而も一面に於て純眞なる性向を有して居る彼等が、皇恩の雄大なるを知り、國恩を知り、社會の恩を知るに至れば、これは必ず一念發起して至誠奉公の誠を捧げるに相違ないのであつて、この點は寧ろ彼の唯物思想に眩惑し、自由主義に熱狂し、個人主義、利己主義に、身も

魂も腐蝕せしめて居る連中よりも非常に優つて居るものがあると思うのである。

若しこの勞働者が飜然として自覺することが出來て、そうしてこの日本精神を備へることが出來たとしたら、如何にそれが勞働者だとしてもこれは立派な日本的紳士だと云ふことを憚らないと思ふ。古來この日本的紳士を稱して『士』と謂つて居る。

即ち典型的な日本人をサムライと稱へ、さうして此のサムライは決してサムライの道に外れたことを、しない事を以て其の名譽として居た。サムライの道は即ち士道であつて、その典型的なものは所謂武士であつた。

武人が常に士道を履むで誤らないから、これを武士と稱し、武人の

士道を以て武士道と名付けて來た。けれども士道は決して武人だけで專有すべきものではない。それが國民の道である以上、如何なる職業、如何なる階級と雖も、この士道を履むで行かねばならぬものだ。殊に明治維新以來、上御一人を君主と仰ぎ奉りて、他は悉く四海平等の臣道を踐まねばならぬ時に於て、日本精神卽ちこの士道を以て御奉公申上げねばならぬことは、之れ實に日本國民の最も大切なる使命であり、且この士道を堅持して居ることが、帝國臣民の誇りでもあるのだ。

而して、この士道を實踐しつゝある者は、之を『士』と稱すべき筈のものであるが故に、若し農夫がこれを實踐すれば、之を「農士」と謂ふべく、又商人がこれを實踐すれば、「商士」と謂はなければならぬ。從

つて勞働者がこの士道を堅持し、之れを實踐する者を自分はこれを「勞士」と稱したいと思ふのである。

而してこれは、決して我田引水的な僭稱では無いと確信してゐるのである。殊に現在の如く產業立國を國是としてゐる時代に於て、この產業組織の中心ともなるべき勞力の供給者卽ち勞働者に對して、而も其の者が日本精神を堅持する者なる限り、これに「勞士」の名稱を與ふる事は蓋し最も機宜に適して居ると思ふのである。

惟うに自覺と謂ふことは之れを持つ者に非常な勇猛心を與へるものである。勞働者にして、若し上述せる勞士としての自覺を持つことが出來れば、これに依つて益々自己の品性を向上せしむる事が出來るし、又斯樣な氣持の上で其の仕事に當るならば、必ずや吾が國

の產業上にも目覺しき貢獻が出來ると思うのである。

而してこの勞士魂を喚起するには、今は實に絕好の時期であるのだ。卽ちこの千古未曾有の大國難に直面し、是が非でもこの日本精神の總動員をしなければならぬ秋である。苟しくも大和民族の血を承け繼いでゐる以上、この戰爭で自分の國が負けても良いと思ふ人は一人も有り得ない。所で若しお互國民の氣力が挫けて、有形無形の激戰を交へつゝある世界列强に對して、若しも吾が國が媾和を乞ふやうな事があつたとしたらどうなる。卽貪婪飽くなき毛唐や支那軍人の爲に日本本土を蹂躙せられたらどうなる。想像しただけでも堪つたものではないのである。吾々が自分の意氣地無さから斯うした目に遭ふのは未だ良い。吾が國の將來を想へ、さうして

自分等の可憐なる子孫を考へた時には、如何に無智であらうが、如何に無教育であらうが、又如何に精神的に頽廢して居らうが、慄然として國民精神を取り戻さずには居られまいと思ふ。又たこれに反して、若し國民がこの日本精神で一致團結し、堅忍不拔の意氣を以つて凡ゆる敵性國を擊滅した場合に、日本の現在竝に將來はどうなるか所謂桃太郎が鬼ヶ島を退治した樣に、金銀珊瑚綾錦、山と積むだ寶物が、恐らく犬や、猿や、雉子位では曳けない程持ちて來る許りではなしに、所謂大東亞共榮圈を確立して、吾が日本帝國は全世界の有史以來未だ嘗つて何れの國にも見ない大飛躍をすると謂ふことを徹底せしめたならば、如何なる惰夫と雖も起たざるを得まいと思ふのである。今や我が國はこの興亡の分岐點に立つて居るのである。これ

程精神的に頽廢して居る人等を覺醒せしめるに適した時期は無いのであつて、又これを覺醒せしむる事が國運の隆興を圖る唯一の途でもあるのである。

八　勞士錬成の余の體驗

『如何にして勞士の錬成を圖るべきか』自分としてはかなり永い間研究もして見たし、又苦心をして來たことでもあつた。

さうして、其の結論は、自由勞働者の如く、永い期間常に原始的な生活のみを繰返して居る者は、何時の間にか夫が第二の習性となつて、その高等な精神機能は殆ど眠つて了つて昏睡狀態になつて居るのである。從つて之に對して日本精神を吹込むと云つても、その智能に訴へて之を認識させると云ふ樣な行き方は甚だその效果が薄い

のである。即ち頭の中で之を諒解せしめるだけではなしに、寧ろ體の方からこれを導いて行つて、さうして知らず〳〵の內に之を體得せしめると云ふことが一番效果的であると云ふ結論に到達したのである。即ち指導者が身を以て之れが範となり、さうして之を訓練して行くのである。ただ漠然と日本精神と云つたつて、仲々その眞意が悟れるものではない、之を體に敎へ之を心に傳ふる所の訓練をして行かねば決して夫は徹底するものではない。

自分は敍上の考へから、嘗つて自由勞働者の精神修養道場を奧多摩の山中に作つたことがあつた。それは東京市の大貯水池、小河內ダムの建設工事に於て、幸ひに自分が其の勞力供給請負人として、唯一人指命を受けた時でありますが、恰も其の工事が世界有數の大工

事であり、又其の場所が警察力と云ふ様なものゝ極めて薄い所であり、且その自由勞働者の收容員數も一千人以上の多數に上ると云ふ關係にあつたもので、多年自分が抱懷して來て居た、自由勞働者の精神訓練、卽ち勞士魂喚起の實驗には絶好の機會だと信じて、敢然として之を斷行して見たのであるが、其の結果は先輩各位の御協力等に依りまして實に豫期以上の體驗を得たのである。

何と云ふにも殆ど無警察にも等しい山間の僻村に一千人以上の自由勞働者を收容して、日本無類の難工事を進めて行くと云ふことは、決してさう簡單な問題ではない。その一千人の中には前科者も相當に居るのであるし、世間からは、毛蟲の様に思はれて居る無賴漢も居る。何しろ社會の持て餘し者ばかりを集めて無警察狀態の土

地に行つたのであるから、先づその落着いた部落卽ち小河内村の保安から心配しなければならぬ、若し村の娘等に暴行でもしはすまいか、又村の家へ押入つて物等盜みはすまいかと云ふこと等考へると、夜間等は殆ど眠ることが出來ない。しかも女氣無しの人里離れた現場で永い期間を送らねばならぬ自由勞働者を思うと一番心配になつたのは婦人に對する危害であつた。

其處で自分はその勞働者全部を十一の宿舍に分宿せしめ、各宿舍に夫々司令、副司令、當番等を置き總て軍隊式に之れを指揮監督する事とし、本部を其の宿舍の中央部に置いて、自身その總司令となり、約二箇年間彼等と其の起居を共にして身を以て之を訓練する事とした。卽ち修練道場と謂つても別に道場と謂ふやうな立派なものが

建つて居るのではない。本部並に各宿舍が卽ち其の道場である。そうして其の講堂に充てられるものは山間の空地であつて、酷寒零度以下二十五度と謂う樣な野天で、或は淸夜に、或は未明に、兵式の敎練をしたり、精神訓話をして行く、しかも其の役員の殆ど八九分迄は今採用して來た許りの見ず知らずの自由勞働者で、況や全員は悉く牛の骨か馬の骨か判らない者許り、總數一千人中自分の知つて伴れてゐつたものは僅かに四人に過ぎない。夫で無理な、少くとも相當負擔の重い訓練をして行くのであるから、それは何時不平が勃發するか判らないのである。若し恨みを買ふやうな事があれば、對手は無數であり味方は僅かに四人に過ぎない。しかも何れも徒手空拳で寸鐵すら帶びて居ない同志であるから、それこそ一と溜りもなく如何なる迫害にも甘じなければならぬのである。然し自分は敢然として之に向ひ、訓練上少しの手心も用ひないで正當なりと信ずる事は何處迄もこれを强調して敢行することに努めた。

斯樣な考へから先づ自分は其の精神修養道場の規程を定め、精神訓練と動作訓練とを併行することにした。卽ちこの兩面の訓練に依て一つは頽廢せる精神の覺醒を圖り、一つは動作の規律に服せしむることに因つて弛緩して居る身體の緊張化を圖ることにしたのである。

玆にうらぶれて身心共に悃廢して居る人達に喚び掛けて、そうして其の本心を取戻させるにはどうすれば良いかと謂ふことに就ては自分も隨分と深く考へさせられた。

苟もその精神の荒怠を匡正するのが主眼である以上、これは是非共知的方面、即ち理論的な方面から彼等の腦の中へ了解さして行く事が本筋だと謂ふやうにも考へたのであるが、然し實際に多數の自由勞働者と向ひ合つて、そうして彼等の眞の性來と謂ふものを直視すると、理智の方面から喚び掛けて。これを奮起せしめると謂ふことは全く至難な問題であることを確めたので、自分は即ち軍隊教練の場合を想起して、この身心兩面の訓練を併行することに決意したのであつた。そうして斯の趣旨に基いて、吾が修練道場は凡て軍隊の場合を模倣し、宛も勞働兵團の如き生活を續けたのである。即ち毎朝早晨の五時には必ず起床せしめることとして午前六時三十分迄には食事を濟ませ、服裝をも整へて、それ〳〵本部前の廣場に集合させるのである。そうしてその六時三十分には必ず各班毎に整頓せしめ、人員點呼を行ひ、號令を以て宮城遙拜の朝禮を行はしむると共に、更に右足を半歩前に踏み出さしめ、左手を以て前半の腰帶を握り、右手の拇指を中にして是を把握せしめ、それを頭上に突き上げるが如く差し上げて『彌榮』を呼號せしめ、是を三度繰り返すことにした。蓋し拇指を中にして他の四指を以て之を握りしめる事は、上御一人を中にして、四海兄弟を以て之れを護ることを意味したるもので、そうして是を高く差し上げて『彌榮』を連呼すると云ふことは、知らず〳〵の中に日本精神を體得せしむるものだと信じたのである。

そうして之を終れば、氣を付け！ の姿勢の儘で精神作興に關する訓示を與へ、然る後に隊伍を整へ、一班より三班迄を前列とし、四班

より以下を順次後列として、軍歌を高唱しながら約一里の行程を仕事場に向つて行進し、午前七時三十分迄には必ず其の現場に到着することにしたのである。

作業中に於ても亦規律を守ることゝし、休憩時間とか、食事時間と云ふ様な休む時間には心置きなく休養せしめると共に、働くべき時間には終始緊張して作業に當らしめる様に意を用ひて行く。即ち心身の緊張は作業中に怪我をするやうな危險を防止することが出來ると同時に、其の能率を著るしく増進することが出來るのであつて、自分等は常に之が勵行に努めた。其うして午後四時半には其の作業を終り、午後五時迄に道具の手入れや、現場の跡方付を濟ませ、また朝の場合の様に隊伍を整へて本部前の廣場迄歸つて來るのであ

る。斯くして又人員の點呼をなし、一應の挨拶を述べて後に解散することにして以上朝からの行事を毎日の日課として之を嚴守せしめたのである

これを彼等自由勞働者の從來の生活と比較したら果してどうであらう。寢たい時には何時までも勝手に眠り續け、怠けたい時には勝手に怠けて來て、飲むことも喰ふことも出來なくなつて、始めて仕方なしに起き出して稼ぎに行くと謂つた様なことが彼等の習慣であつたのであるが、自分は之に對して非常に嚴格は日課を課したのである。即ち人並外れな自墮落な生活に慣れて來た人達に對して、普通の人達よりも餘程嚴重な規律生活を行はしめたのであるから、その結果は、其の窮屈に堪り兼ねて惡い反響が起りはしまいかと謂

ふことを、窃かに心配したのであつたが、案ずるよりも生むが易く、事實は何人もこれに對して苦情を漏すやうなことはなかつたのである。即ち此方が彼等の爲になることをする場合、換言すれば彼等の向上とか、利益とか、榮達とか謂ふことを此方が眞劍になつて考へてやる場合には、相當それが彼等にとつてきつ過ぎようが、窮屈すぎようが、それに對して不平を謂ふことの出來ないだけの良心は、彼等と雖も持つてゐることが判つたのである。

尙自分の修錬道場は、作業上の日課だけを嚴しくしただけではなく、假令その宿舍に休養して居る時間中であつても、苟も公序良俗に反したやうな行爲を嚴禁して來た。例へば賭博をするとか、盜みをするとか謂ふような行爲を發見した場合は、直ちに之を本部に伴れ

て來て、そうして良く其の不心得を諭してやる。然し賭博の樣なことは殆ど彼等の常習であるので、仲々諭した位のことでは前非を後悔する樣な氣持にはなりかねる。然し彼等と雖、それが惡い事であると謂ふ認識だけは持つて居るので、若し之を見付けた樣な場合には、神代の『禊』(ミソギ)にならつて、半ば强制的に多摩の清流で冷水を浴びさせることにした。即ち惡い事をした場合には、自分でその垢を洗ひ落して、心身共に奇麗になれと謂ふやうに諭して、必ずこれを勵行せしめた。假令嚴寒の深夜と雖それを斷行せしめると謂つた具合で、これには相當耐へたらしかつたが、然し見付けられたんだから止むを得ない謂ふやうに觀念して、澁々ながらも裸になつて自分で冷水を浴びて來る。そう謂つた所に、如何にも彼等の純眞さが見受けら

れるのであつて、其の心情を酌むで思はず眼頭が熱くなるやうな時もあるのであるが、然しこうした事の爲に殆どその習慣であつた賭博でも、又盜みでも、それが惡い事だと謂ふ認識が段々と强くなつて來て、何時の間にか改悛をして再びこれを仕ないやうになつて來たのである。

斯うした相當嚴格な規律を遵守さして居るにも不拘、修錬道場の同人は一人の不平を訴へる者もなく酷寒の深夜に冷水浴を要求してもこれを遺恨にする者もなく、平々坦々として勞士の錬成と謂ふ大目的が達成されて行くことが出來た。斯くして二箇年の歲月が經過した時分にはこの修錬道場同人の擧措動作は悉く改つて、殆どそれは別人を見るやうな感があつたのである。

若し人が、この修錬道場に來ない以前の自由勞働者の生活を見て居つて、そうして修錬道場の日課なり規律なりを見たならば、必ずその秋霜烈日と謂つたやうな過酷さに一驚すると思うのであるが、然し其の當人等は案外平氣で、默々としてそれに服從して行くそうして一人の夫れに不平を懷く者すら無い。しかも其の規律を要求する者は、自分一人である、卽ち一千人の人に向つて窮屈な思ひをさせるのはこの一人の要求であるのだが、其の一千人は此の一人に對して羊の如く從順にして吳れる。修錬道場に來る迄はやれ前科者と謂はれ、やれ無賴漢と謂はれ、殆んど箸にも棒にも懸らない樣に謂はれた人達でも、一度この道場に入れば必ず世の中の良民以上に溫良な人になる。實に立派な勞士に錬成されて行くのである。自分は

つく〳〵此處が日本人の特長であるのだなと感激したのであつた。

又斯うした人達が覺醒して自分の本心を取り戻すと、其處に又謂ふに謂はれぬ美點が出て來るのである。例へば自分がその修錬道場に彼等と共に二年程暮してから、健康其他の事情でその道場を後任者に讓つた東京に歸ることになつた時など、彼等は云ひ合せたやうに別れを惜しむで、そうしてアノ鬼のやうな顏から涙を流して、丸で小供のやうに泣いてくれたのである。

いよ〳〵自分の出立の日などは、その宿舍長と謂つたやうな主立つた者を二十名程選んで、五里餘もあるアノ山道を歩いて、御岳驛迄送つて來て呉れたのである。自分としても其處でそのまゝ別れるに忍びない氣持がして、驛前の河鹿園で心許りの別宴を設けたので

あるが、盃を重ねてもどうも酔ひが廻らないので、何とかしてその氣分を新にしたいと考へて、強ひて一つ宛の隱し藝をすることにしたのであつたが、唄ひ出す誰もの歌が、何れも聲がかすれて居て、何時の間にか途中で聲が聞えなくなり、誰差俯向いて齒を喰ひ縛つて居るのである。こんな純情が果して文化人に見ることが出來るであらうか。自分は心から感動させられずには居られなかつた。卽ちこの氣持が日本魂ではなかろうか。家に入つては、その家と一體となり、部落に入つてはその部落と一體になり、國家に入つてはその國家と一體となる、努めてそうなるのではなしに自然と其の氣持がそうなつて行く、一體となつてゐるから同志と別れるのが辛くなる、一體となつてゐるから潔ぎよく身命を捧げることが出來る、其の情義の

發露する處は卽ち一つでは無かろうか。所謂忠臣は孝子の門より出づで、此の純情な感激性が、家にあつては孝子となつて、國に在つては忠臣となるのであつて、それが偶々、友人間にあつた場合にセツない信義の情となつて現はれて來るのだと思ふ。果して然りとすれば、自分のやうな者に對する單なる惜別の涙も、斯の大和魂の片鱗であらねばならぬ。卽ちこうした人達が覺醒して眞にこの純情を發露するやうになれば、夫こそ皇軍の精華は其の人達に依つて開かるると思うのである。

自分は如上の體驗を更に如實に具現させる爲に、別に本卷の末尾に當時の寫眞と日記文の一部とを添付することにした。

固より之に依つて、その全貌を知ることは出來ないのでありますが、幸ひにその一端を窺知して頂けるならば洵に有難いと思ふ。

五、結論

自由勞働者卽ち供給人夫の數は、全國を通じて二百萬人に達し、總勞働者數の九百萬人に對して、殆ど其の四分の一を占めて居る。そうして其の體力は剛健であるし、臂力は極めて強い。しかも非常災害と謂ふやうな場合に案外平氣な氣持ちで居られるし、亦た不自由な生活にも決して閉口垂れない。若しこれを善導して、眞に國民的意識を堅持せしむることが出來たとなれば、これ程始末の良い、またこれ程强い國民軍は有るまいと思ふ。而して一朝其の指導を誤まつて、彼等に暴戾不逞な非人道的な氣持を胚胎させて仕舞つたとし

たら、戰爭などの爲めに社會の秩序が混亂したやうな場合に、これ程良民にとつて物騷な存在は有るまい。即ちこれを導くの良否に依つて、これは鬼にも佛にもなるのである。世の爲政家たるもの、今にして思ひを之に致さない樣なことが在れば、恐らく悔を千載に貽すであらう。

しかも現在に於て、彼等は立派に國家産業の一翼を擔任して居る。從つて其の尨大なる勞働力の一擧手一投足は、忽ち國家産業の能率の上に一大影響を齎すことになるのであるから、この點から見ても彼等に國民的の自覺を與へ、そうしてこの時局を認識せしめると謂ふ事は、國家として極めて肝要なことだと思ふ。

即ち戰爭の方から見ても、亦た産業の方から見ても、彼等の善導は

所謂焦眉の急務である。そうして其の善導は困難な問題であるかと謂ふに決して六ヶ敷い問題ではない。自分の體驗に依つて之れを觀れば、其の氣持が純眞でありその性來が智能的でない許りに、これを導くと云ふことは、寧ろ其處に容易なものがあるのである。今日産業報國運動は、國家の全産業を風靡してゐる。そうして又た政府も、現下の時局に於てこの運動の重大性を認め、其の强化擴充を圖る爲めに自ら指導の任に當り、政府の責任に於て之れを發展せしむべく大いに努力して居るのである。即ち政府はこの産業報國運動を以て國策の一つとなし、その組織と、これに依る運動とを以て、勞働行政の中核體となし、專心その育成に努め、各府縣に夫々産業報國聯合會を設けて、その會長には必ず地方長官を充てゝ、鋭意産業報國會

の設置勸奬に當つて居るのであるが、之れが爲めに昨年一月には全國に既に約二萬の産業報國會が作られ、會員は三百萬人を突破してゐる。然るにどうしたことか自由勞働者に對しては、政府も地方長官も未だ何等手を付けやうと仕て居ない。

日本の勞働者に、産業報國の精神を堅持させる必要は、專屬の勤務勞働者も自由勞働者も凡て一樣である。寧ろ專屬の勤務勞働者は、其の日常勤務と謂ふことに依つて既に一種の規律に服して居るのであるし、又た常時指導者に從屬して行くことに慣れて居る。しかも其の生活も安定を得て居るので、その環境上彼等の性行は何時ではなしに順良さを持つやうになつて居るのであるが、自由勞働者の場合は仲々左樣な條件が具備されてゐない。彼等の境遇は孤立的

であり、彼等の生活は不安定である。從つて産業報國の精神を觀念づけるには、前者よりも後者の方が餘程困難なものがあるのである。其の比較的容易な方面にのみ主力を注いで、其の困難な方面には手を付けないと謂ふのは洵にその當を得てゐないと思ふ。

茲に於て吾々は、この産業報國運動の趣旨に法つて、一面に於ては高度國防國家の建設の爲めに、また他の一面に於ては國家産業の能率增進の爲めに、全日本の自由勞働者に對する精神强化運動を企圖し、勞務供給業者の一致結束に依つて、この目的完遂に向つて邁進せんとして居るのである。即ち吾々は、今や結成せられんとしてゐる全國勞務者供給業組合を通じて、自由勞働者自體の福祉に盡すと共に、これに對して日本精神の啓發に努め、所謂勞士の訓育に依つて最

も屈竟なる勞働軍の錬成を圖り、一朝有時の場合には之れを以て國防の一翼を擔任せんとするのである。又た斯うする事が古來仁俠を以て謳はれて來た吾が業界の美風を顯揚する所以でもあると信ずるのである。

【附　錄】

小河內精神修養道場概要

本道場は勞士を錬成することを主眼として設けたもので、その訓練は、主として軍隊式訓練を模倣すると共に、之れに古神道的な宗教味を加へ、心身の兩面から日本精神を育成すると同時に、既に習性となつてゐる自由勞働者の自墮落な性向を匡正して行くことを企圖したのである。

この道場が具體的にどんな訓練を行つて、そうしてどんな成果を收めたかと謂ふことは、玆に一々其の例を擧げてこれを說明することは、實にその煩に耐へない。百聞は一見に如かずと謂ふから、自分は先づ當時の實情を寫眞にして其の說明に代へると共に、警備隊日誌の一部を摘記して、之れに依つて其の片鱗を窺知して貰うことゝした。

この警備隊と謂ふのは、本道場のある村內の治安を維持する爲めに設けたもので、本道場にはこの外に消防隊と謂ふものも設けて居つたのである。何れも各宿舍か

ら選抜した勞士を以て隊を組織したもので、從つて警備隊日誌と謂ふのも、この俄か作りの勞士、有り體に謂へば、應募して入所した許りの日傭人足が之れを記入して居るのである。故にその文言も甚だ盡し得ないものがあると同時に、繁閑洵に其の要を得てゐないものがある。乍然、何れも緊張した氣持ちで之れを書いて居る事は、その言々句々の間に判然現はれて居ると思ふ。即ちこの眞劍味な所を認めて頂けば、それで自分の希望は達せられたのだと信ずるのである。

○

警備隊勤務規程

一、警備隊ハ道場、各宿舍、及ビ附近一帶ノ治安維持ニ當ルモノトス

二、隊員ハ言動ヲ愼ミ、勞士心得ヲ堅ク遵奉シ、一般勞士ニ其ノ範ヲ示スベシ

三、警備隊ハ之ヲ三班ニ分ツ。各班ハ交互ニ交替勤務ニ當ルモノトス。但シ警備司令ニ於テ必要アリト認メタルトキハ非番隊員ト雖呼集スベシ

四、當番隊ハ午前四時五十分ニ交替スベシ

五、當番隊ハ起床時ニ先ヅ國旗ヲ揭揚シ、夕刻之ヲ撤收スベシ（雨天ノ際ハ之レヲ行ハズ）

六、當番隊ハ左記ノ通リ時報ヲ爲スベシ

午前五時（起床時）一分間
午前五時四十分（本部前集合）〃
午前六時三十分（現場ニ向テ出發）〃
午後五時三十分（解散歸宿）〃
午後九時（就寢時）〃

但シ不時呼集ノ爲メ警報ヲ發スルコトアルベシ。コノ場合當番員ハ急遽各宿舍ニ之レヲ速報シ、直ニ其ノ全員ヲ本部前ニ集合セシムベシ

七、警備隊ハ火災竝ニ消防演習ノ有リタル場合ハ全員之レニ參加協力スベシ

八、警備上必要アリト認メタル場合ハ、警備隊ハ其ノ事由ヲ總務ニ具申シテ消防隊ノ應援ヲ求ムベシ

九、當番隊ハ警備日誌ニ必要事項ヲ記載シテ之レヲ總務ニ提出スベシ

十、隊員ハ勤務中必ズ制服ヲ着用スベシ

十一、本規程ハ實狀ニ則シ、必要ニ應ジテ改廢スベシ

昭和十三年一月

修養道場　總務部

警備日誌（摘記）

昭和十三年

一月元旦　第三宿舍副長　平松
　　第五宿舍副長　高田

一、新春ヲ迎ヘテ各宿舍共和氣堂ニ滿ツ。今日ハ休養日トシテ勞士一同何レモ朗ラカナリ。

一、早朝國旗揭揚塔ノ前ニ全員集合、宮城ヲ遙拜シ彌榮ヲ三唱シテ朝禮トナス

一、各宿舍、各方面共靜肅異狀ナシ

一月二日　第三宿舍副長　平松
　　第五宿舍副長　高田

一、本日モ休養日ナリ、午前十時ヨリ本部ニ於テ浪花節、漫才等ノ餘興ヲ開催シ、全員ニ觀覽セシム。所長ガ東京ヨリ藝人ノ一流所ヲ連行シタルモノニテ、會場ハ立錐ノ餘地ナシ。終日歡ヲ盡シ午後四時終了

一、夜間各宿舍共靜肅ナリ

一月三日　第五宿舍副長　高田
　　第六宿舍副長　保坂

一、各宿舍共靜肅、勞士何レモ休養

一、午後六時頃、第一宿舍副長ガ湯殿方面ヲ巡警中、某消防班長ガ附近ノ料理店ニ於テ、勘定ノ行違ヒニヨリ爭論ヲナシタリトノ事實ヲ聞キ込ミ、勞士トシテ誠ニ遺憾ナルモノ有リト認メ、之レヲ各副長警備隊員ニ報告シ、本人ヲ詰所ニ喚ヒ寄セ之レヲ問及シタルニ、悔悛ノ情切ナルモノ有ルヲ認メタルヲ以テ、將來ヲ誓約セシメ、且ツ其ノ料理店ニ謝罪セシメテ之レヲ解決セリ

一、各宿舍、各方面共ニ異狀ナシ

一月二十一日　第八副長　佐々木
　　第九副長　一　戸

一、本日ハ非常警備ニテ副長四名、消防班員八名、各宿舎ヨリ一名宛ヲ選抜シ、臨時警備ニ就カシム

二、午後七時半ヨリ九時半ニ至ル時間中、一戸警備員外三名下山口方面ヲ警備中、第三宿長ノ證明書ヲ携ヘタルモノ二名下山セリ、其ノ時コノ下山者ノ見送人ト稱シ、第三宿舎ノ大竹某ナル者宿長ノ許可ヲ受ケタリト申告シテ警備區域ヲ通過シタルヲ默認シタルニ、右ハ全然虚構ナル旨後刻判明シ、今後證明ヲ持參セサル者ノ通過ニハ充分ノ注意ヲナスベキ旨命令セラル

三、午後十時頃第二宿舎長ノ證明ヲ所持スル者十五名下山セリ

四、午前零時各宿舎ヲ巡檢シタルモ異狀ナシ

一月二十二日　第一副長　佐　藤
　　第三副長　平　松

一、各宿舎、各方面共ニ異狀ナシ

二、午後八時頃購買部長等各宿舎ヲ巡視シタルモ何等異狀ナキ旨報告ニ接ス

三、午前一時頃枝川消防司令、寺崎副司令及ヒ清水第六宿舎長等警備巡徊中、熱海、原ノ路傍ニ於テ第一宿舎勞士三名カ飲酒ノタメ銘酊シテ高聲放歌スルヲ認メタルヲ以テ夜更ケノ事故早ク歸宿スヘキヤウ注意シタルニ、其ノ中ノ一人下田某ハ不穩ノ言辭ヲ弄シテ之ニ反抗スルガ如キ態度ニ出テタルヲ以テ、二名ノ同伴者ヲシテ之ヲ連行歸宿モシメタリ

枝川消防司令等ハ本部ニ引キ揚ケタル後第一宿長ト共ニ前記下田某ヲ詰所ニ喚ビ出シ、其ノ不心得ヲ諭シタル所、同人ハ北海道方面ノ人夫ニ應募シタルコトアリ、當時ヨリ幹部若クハ棒頭ト云フガ如キ者ニ反感ヲ抱キ居タル所、飲酒ノ爲メ錯覺ヲ招キ前記ノ如キ擧動ニ出テタル由ニテ、警備員ニ對シテ何等含ム所無キ旨判明シタルヲ以テ、當人ノ陳謝ニ免シ將來ヲ訓戒シテ歸宿セシメタリ

二月五日　第二副長代理　篠　塚
　　第九副長　一　戸

一、午後九時半所長自ラ各宿舎ヲ巡視シタルニ、第七宿舎ニ於テ所屬勞士關根某山下某外二名ノ者ガ賭博ヲ爲シツヽ在ルヲ發見シ、所長ヨリ斯ノ如キ行爲ハ絶對ニ之ヲ禁止スル旨ヲ言

渡シテ直ニ之ヲ中止セシメタリ。

所長ハ更ニ宿舍長ヲ喚ムテ之レガ取締リニ就テ問責セントシタルニ、同宿舍長ハ外出シテ附近ノ飲食店ニ於テ飲酒中ナルヲ知リ、所長ハ直ニ同所ニ趣キ、自己ノ擔任スヘキ宿舍ヲ勞士達ニ預ケテ外出シ、規定ノ時間ヲモ忘レテ飲酒ニ耽ケルガ如キハ、精神道場ノ風紀ヲ紊ルモノナル事ヲ訓戒シ、直ニ歸宿セシメ宿舍ノ取締ニ當ラシメタリ。

二、其ノ他異狀ナシ

二月六日　第三副長　平松
　　第五副長　小鍛治

一、五日ノ夜第七宿舍ニ於テ賭博ヲ爲シタル勞士六名ノ處分ニ就テ役員會ヲ開キタル結果、一切ヲ所長ノ裁斷ニ委スルコトヽナレリ。所長ハ午後六時半頃其ノ勞士等ヲ詰所ニ喚問シテ懇々ト其ノ不心得ヲ諭トシ、僅カニ五六名ノ所爲ニ依ツテ、道場ニ在ル全體ノ勞士ノ名譽ヲ毀損スル所以ヲ說キタル所、其ノ勞士達ハ衷心ヨリ悔悟シ、涙ヲ流シテ其ノ非ヲ謝罪シタルヲ以テ、所長ハ然ラバ自發的ニ水垢離ヲ取ツテ心身ヲ淸メテ、神佛ニ對シ、又ハ勞士全體ニ對シテ心カラオ詫ビヲ申上ゲルコトガ然ルベキ旨ヲ言ヒ聞カセ、勞士達モ自ラ進ムテ之ヲ爲スベキ旨ヲ申出テタルニ依リ、午後八時非常「號鈴」ヲ以テ各宿舍ヨリ勞士ヲ集合セシメ所長ヨリ一切ノ事項ヲ報告シ、併セテ斯ノ如キ行爲ノ起リタル事ハ一ツニ所長ノ不德ノ致ス所デ、全ク自身ノ罪デアルト全員ニ對シテ涙ヲ流シテオ詫ビノ言葉ヲ述ベラレレバ、聽衆何レモ感激シテ歔泣ク者スラ有リ、斯クテ參集者全員ニテ此ノ道場ヨリ如斯不祥事ヲ出シタルコトヲ

兩陛下ニオ詫ヒ申上ケテ散會セシメタリ

一、各宿舍、各方面共異狀ナシ

二月十一日　第六副長　保坂
　　第七副長　大塚

一、午後六時四十分工事現場ノ右側斷崖ガ（一名お花踊り）ガ崩壞シテ、府道ヲ閉塞シタル旨ノ急報ニ接シ、直ニ各宿舍ヨリ屈竟ノ者二名宛ヲ選拔シテ、之ニ柴田總務、栗原庶務、第一宿舍長、第二宿舍長ヲ加ヘテ現場ニ急行セシメタリ。

崩壞箇所ハ相當廣範圍ニ涉リ、巨大ナル岩石ノ取リ退ケ等極メテ難工事ナルヲ想ハシメタルモ、協力一致之ニ當リタル結果午後十一時四十分漸ク府道ノ開通ヲ見ルニ至レリ。

所長ヨリ其ノ勤勞ニ報ヘ、且ツ寒冷ヲ癒ス爲メ日本酒ノ饗應アリ、午前一時一同喜ンデ歸宿就寢セリ。

二、各宿舍、各方面共ニ其ノ他異常ナシ

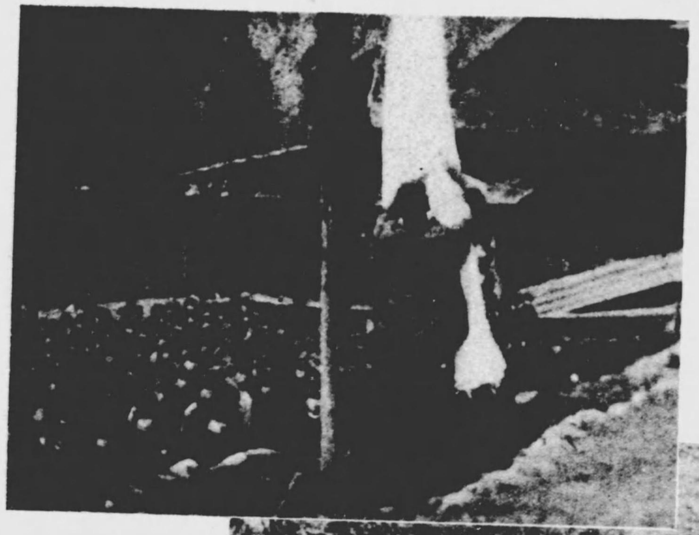
三月四日　第五副長　小鍜治
　　第六副長　保　坂

一、午前六時五十分靑梅警察署長部長以下四名ヲ帶同シテ來所セラレ、親シク當道場ノ活動狀況ヲ視察シ、勞士ニ對シテ非常時局ニ對處スベキ心構ヘニ就テ訓話有リタリ。

一、午前八時三十分ヨリ正午ニ至ル迄各宿舍ノ淸潔及ヒ整頓ヲ爲サシメタリ。

一、午後半日勤務

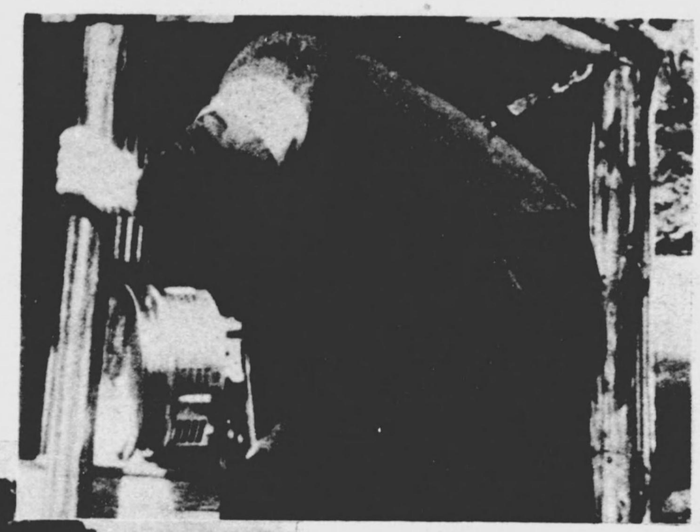
一、夜間各宿舍、各方面異狀ヲ認メズ



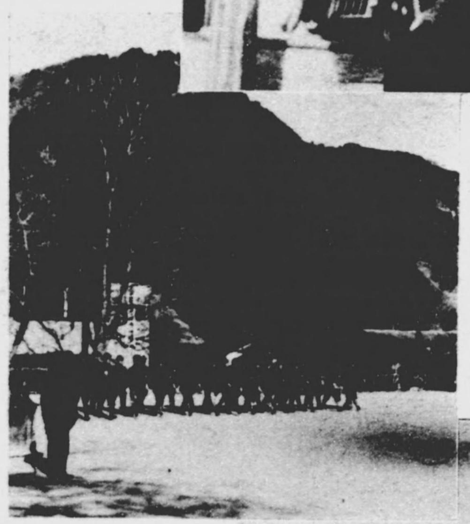
← 毎朝集合して君ケ代を合唱し國旗を揭揚す

↑ 大日本精神修養道場入口

← 君ケ代を終つて遙かに宮城を拜す



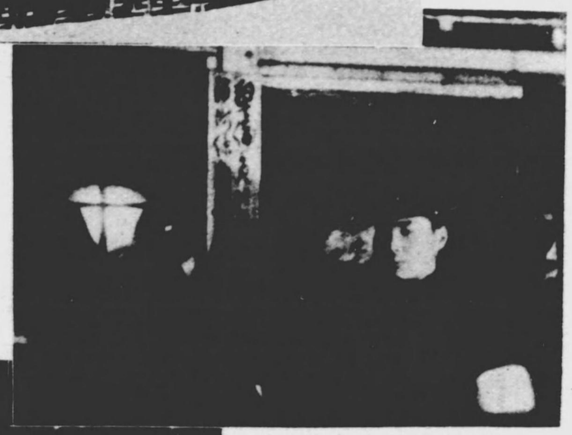
→ 起床・食事・集合・消燈等は總てサイレンで報す



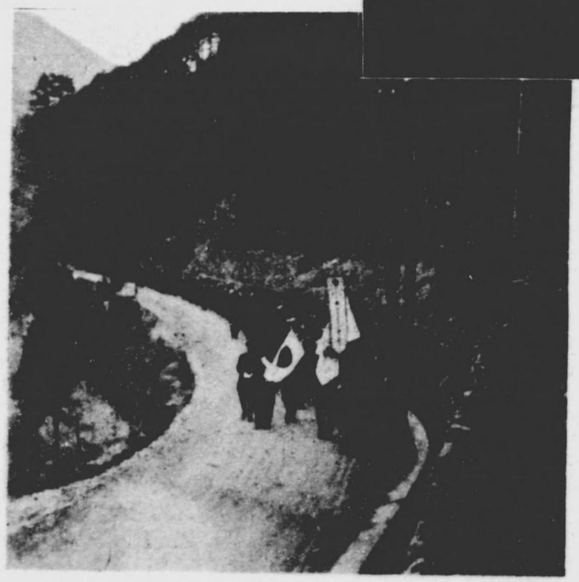
← 軍歌を唱て作業場に行進

↑ 消防班の訓練

← 名士の講演を聴く勞士達



↑ 挨拶は擧手で行ふ

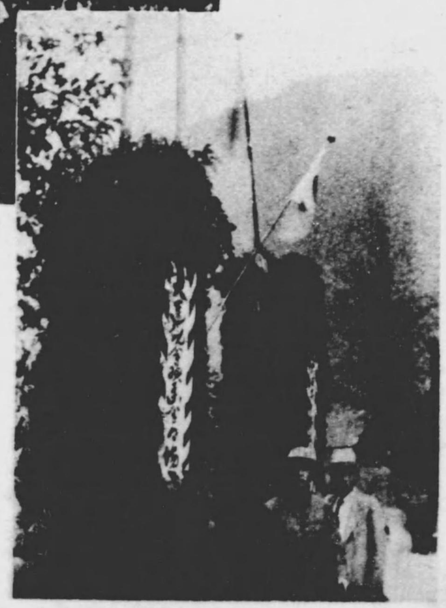


← 應召兵士の見送り

415
89

一　慰安角力大會

←　運動會場全景



→　慰安大運動會場入口
（凡て勞士達の手になる）

昭和十六年四月十五日印刷
昭和十六年四月二十日發行　（非賣品）

東京市芝區芝浦二ノ一
著作兼發行者　飛田勝造

東京市芝區濱松町一ノ十三
印刷者　植田庄助

東京市芝區濱松町一ノ十三
印刷所　成文堂印刷所

不許複製